

2005年11月1日

日本拳法会

会長 小西 丕 殿

徳島大学渭水拳友会・日本拳法部
顧問医 笠井秀夫（医学部OB）
海辺の杜ホスピタル精神神経科
高知県高知市長浜 251

安全面の配慮（提言）

拝啓

晩秋の候、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

さて、この度、徳島大学日本拳法部が防具の改良を実施し、公式試合での使用の承認をお願いするにあたり、大変恐縮ながら、医学的立場から安全面への配慮に対する提言をさせていただきたいと存じます。

本来、全ての接触性のスポーツは頭部外傷の危険を伴います。頭部外傷はアメリカンフットボール、ボクシング、ラグビー、ホッケーといった激しいコンタクトプレーを伴うスポーツで起こりやすいものですが、最近ではそれらのメジャースポーツにおける安全意識の高まりから外傷の発生機転に関する分析も多に行われ、それに伴いルール変更による安全基準の見直しや装具類の改良、頭部外傷を受けた選手への健康管理に関する具体的なガイドラインまで作成されるようになってきております。特に最近の研究により、繰り返し軽い頭部外傷を受ける事によって、選手の認知能力に累積的影響があることが分ってきたことで、より安全基準の強化が図られるようになりました。

頭部外傷において重症で生命予後の悪いものに硬膜外血腫、硬膜下血腫、脳内出血、びまん性軸索損傷、くも膜下出血、脳挫傷などがあり、これらに対する注意、予防は当然のことではありますが、見逃されがちなのは脳震盪と称される軽症頭部外傷への対策です。注目すべきは脳震盪による蓄積されたダメージが慢性の脳障害を引き起こすという点にあります。

日本拳法においては防具装着により顔面への打撃が可能とされている事が大きな特徴であり、打撃による直接的な損傷が無い点が魅力とされてきました。当然ながら防具装着のないフルコンタクト空手やボクシングに比べれば幾分安全性は高いものといえます。ただ、上述したように、防具の上からでも脳損傷

は完全に予防する事は不可能であり、たとえ急性の損傷を免れたとしても繰り返し防具練習を行う以上、慢性的な脳へのダメージの蓄積は避けられません。むしろ防具を装着しているという安心感があるがゆえに、脳へのダメージに対して無防備ともいえる練習方法をとってしまっている場面も少なくないように思われます。

今後、日本拳法人口が増加するに伴い、必然的に事故件数の増加や後遺障害の発生頻度の増加が予想されます。防具練習の根本的な見直しの必要性も議論すべきところではありますが、常に防具の改良を進め、安全性を高めていく試みは、防具の形式や伝統を守っていく以上に重要な課題であると言えるのではないのでしょうか。

防具改良については日本拳法会におかれましても常々ご検討されていることと推察しますが、今回、徳島大学より提案のあった改良点につきましても、ご理解、ご高配を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。

敬具